

「デカゾク〜我ら捜査一家〜」

第一話

壽倉 雅

登場人物

- 須堀元気（16） 主人公、中央高校一年生
- 須堀冬美（41） 四兄妹の四番目、元気の母、中央署交通課
- 須堀康孝（43） 元気の父、中央署生活安全課
- 須堀春雄（享年40） 四兄妹の一番目、十二年前に殉職した刑事
- 須堀虹子（50） 春雄の妻、県警本部長
- 須堀あかね（23） 春雄と虹子の娘、中央署地域課
- 須堀夏代（46） 四兄妹の二番目、中央署刑事課班長
- 浜川健作（48） 夏代の元夫、中央署総務課
- 須堀玲奈（16） 玲奈の娘、中央高校一年生
- 須堀秋彦（44） 四兄妹の三番目、中央署組織対策課
- 須堀佐和（42） 秋彦の妻、中央署鑑識課
- 高下透（29） 秋彦の後輩刑事
- 真山優子（16） 元気と玲奈の同級生
- 夏代の後輩
- 康孝の同僚A
- 康孝の同僚B
- 佐和の同僚
- 一ノ瀬よね（79） 相談に来る老女
- 水沼龍一（26） 詐欺グループのリーダー
- 水沼一郎（63） 龍一の父、元法務大臣
- 黒田（37） 手配中の犯人
- 龍一の部下A
- 龍一の部下B
- 住職

1 街

犯人・黒田くろだ（37）が走って逃げている――須堀秋彦すぼりあきひこ（44）と部下・高下たかした透とわろ（29）が走って後を追いかけている。

秋彦「待て、コラ！」

2 街

黒田が走って逃げている――後を追っている秋彦と透。

3 中央高校・校門

黒田が校門をよじ登り、中へ侵入する――秋彦と透が追いかけてくると、立ち止まる。

透「先輩、まずいっすよ」

秋彦、学校の看板を見る。

秋彦「『中央高等学校』って……まさか」

4 同・ロビー

黒田が侵入している――廊下を通り過ぎる生徒たちの悲鳴が響き渡る。

5 同・二階の廊下

須堀元氣すぼりげんき（16）が、雑巾の入ったバケツに水を入れている。

6 同・ロビー

黒田が元氣の従妹・玲奈れいな（16）を人質に取って、包丁を突き付けている。

黒田「おい、大人しくしろ。この女がどうなっても良いのか」

と、秋彦と透が駆けつける。

秋彦「玲奈！」

玲奈「あ……秋彦叔父さん」

秋彦「待ってる。すぐ助けてやる」

と、後ろから肩を叩かれる秋彦――振り返って、目を見開く秋彦。

秋彦「冬美。どうしてここに」

と、元氣の母・冬美ふゆみ（41）が立って

いる。

冬美「話は後。今は何とか、玲奈ちゃんを助けなさいと」

玲奈「冬美叔母さん……」

冬美「玲奈ちゃん。もう少しの辛抱だからね。

叔母さんたちに任せなさい」

怯えながらも頷く玲奈。

7 同・二階の廊下

鼻歌を歌いながら雑巾絞りをしている

元氣——と、クラスメイト・真山優子^{まやまゆうこ}

(16) が走ってやってくる。

優子「元氣！ ねえ、大変大変」

元氣「どうしたんだよ、優子。そんなに慌てて」

優子「立てこもりよ……立てこもり！」

元氣「立てこもり！？」

8 同・ロビー

職員や生徒たちが騒然としている中、

睨み合いを続ける秋彦、冬美、透、黒田。不安そうにその様子を見ている玲奈。

9 中央署・鑑識課

パソコンと書類を見ながら、鑑定をしている秋彦の妻・佐和（42）——同僚の職員が入ってくると、

職員「須堀さん、中央高校で立てこもり事件発生だって」

佐和「え？ 中央高校？」

職員「手配中の犯人が、高校の敷地内に入ったって。しかも、その犯人追ってたのが、ご主人ですって」

佐和「うちの人が……？」

10 同・生活安全課

元気の父・隆文（43）たかふみが入ってくる。康孝「戻りました」

と、同僚たちが『中央高校立てこもり

事件』のニュースを見ている

康孝「どうしたの？」

同僚A「ああ、須堀さん。中央高校で立てこ

もり事件ですって」

康孝「え、中央高校？」

同僚B「どうかしました？」

康孝「息子と姪っ子が通ってる学校だ」

一同「ええッ……！！？」

啞然としている康孝。

11 道

停車中の乗用車に、駐車違反の切符を

切っている元気の従姉・あかね（23）

——街頭テレビに、『中央高校立てこ

もり事件』のニュースが映っている。

あかね「中央高校って……まさか……！！」

12 県警本部・全景

13 同・本部長室

あかねの母・虹子（50）が仕事をしている——と、電話が鳴る。着信はあかねである。

虹子「（電話に出て）もしもし、どうしたのあかね」

あかねの声「ねえ母さん、大変。中央高校で立てこもり事件発生」

虹子「立てこもり事件？」

14 道

あかね「（電話に）中央高校って、確か元気と玲奈が通ってる学校じゃなかったっけ？」

虹子の声「あ、そうだわ……」

あかね「大丈夫かな……」

15 県警本部・本部長室

虹子「管轄は中央署でしょ？ すぐに確認取るわ。情報ありがとう。じゃ」

と、電話を切ると、再度電話をかけて、虹子「もしもし、夏代さん。中央高校で立て

こもり事件が発生したって報告があったんだけど」

16 路上を走る覆面パトカー

17 そのパトカーの中

後輩刑事が運転しており、助手席に玲

奈の母・夏代^{なつよ}（46）が座っている。

夏代「（電話に）そうなんです。さつき冬美から電話があつたんですけど、人質に取られてるの、玲奈なんですよ」

虹子の声「え？」

夏代「しかも、立てこもり中の男、私が今追ってる殺人事件の容疑者として疑ってた奴なんです。だから、私も今現場向かってます。（と後輩刑事に）もっとスピード出さないよ」

後輩「あ……はい」

虹子の声「人質の命が最優先よ」

夏代「分かっています。また進展あったら、報

告します（と電話を切る）」

18 中央高校・ロビー

まだ睨み合いを続ける秋彦、冬美、透、黒田。と、黒田と玲奈の上に突然水が降ってくる。

訝しそうに二階を見上げる一同。二階から、バケツを持った元気が上半身を乗り出す。

元気「みんな、今だ！」

秋彦「よっしゃー！」

と、秋彦が黒田を背負い投げする――黒田が倒れ、秋彦が押さえつける。

秋彦「確保ー！」

透、鞆からタオルを取り出すと、タオルで包丁を回収する。

透「凶器回収！」

冬美、玲奈を抱きしめる。

冬美「玲奈ちゃん、大丈夫だった」

玲奈「うん……」

秋彦「無事で何よりだ！」

19 同・グラウンド

パトカーが来ており、黒田が警察に連行される。見送る秋彦、透、冬美。

と、元気がやってくる。

元氣「いやいや、皆さん見事なチームプレイで」

秋彦「おお、元氣。（とグータッチをすると）

お前のおかげだ」

と、夏代の乗ったパトカーが到着する

——助手席から夏代が慌てて降りてくる。

秋彦「姉貴？」

夏代「玲奈は？」

元氣「ああ。今、着替えてる」

夏代「大丈夫なの？」

元氣「全然」

冬美「姉さん、何しに来たの？」

夏代「玲奈のことが心配だったのよ。それに、

(と黒田の腕をつかんで) こいつ、私が今調べてた女子大生殺人事件の犯人なの。こんな形で会うなんてね」

秋彦「そうだったのか。俺はこいつを、大麻所持法違反で追ってたんだよ」

元氣「叩けば埃が出るっていうのは、こういうことを言うんだね」

黒田「お前ら、一体……」

秋彦「中央警察署組織対策課、須堀秋彦」

夏代「同じく、中央警察署刑事課班長 須堀

夏代」

冬美「同じく、中央警察署交通課 須堀冬美」

元氣「紹介しましょう。左から俺の母さん、

伯父さん、伯母さんです」

黒田「マジかよ……」

秋彦「(刑事たちに) 連れてけ」

刑事たち、黒田をパトカーに乗せると

出発していく。

透「お手柄でした。さすがは先輩の甥っ子さ
んだ」

夏代「そりゃ元気だって、警察官の血を引く
我ら須堀家の一員だものね」

元気「もちろん！ てか、何で母さん今日学校
校いたの？」

冬美「今日は、半休もらってPTAの婦人会
の集まりに来てたの」

夏代「あ、しまった。完璧忘れた」

冬美「だと思った」

元気「あの犯人もついてないよね。立てこも
った学校に、こんなに刑事が揃っちゃうな
んて」

と、笑い合う一同——と、ジャージ姿
になった玲奈が、優子を従えてやって
くる。

玲奈「ちよっと、元気！」

元気「どうしたんだよ、その恰好」

玲奈「あんたが水なんて掛けるからでしょ。
いくら犯人捕まえるためだからって、何も
あそこまでしなくたって……。おかげで制
服も下着もびしょびしょになっちゃったじ

やない」

夏代「玲奈、大丈夫だった？ 怪我ない？」

玲奈「大丈夫。服と下着が濡れただけ」

夏代「濡れたの？」

玲奈「（元気を指さして）こいつが犯人捕まえるために二階からバケツの水かけたの。

だから、私もこのザマってわけ」

夏代「そういうことだったの」

元気「制服や下着が濡れたぐらいどうってことないだろ。命が助かっただけでもありがたいと思わなきゃ」

玲奈「バーカ！」

と、足早に去っていく——後を追う優子。

優子「あ、ちよっと玲奈」

元気、呆れ顔になる。

元気「おい玲奈！ お前、助けてやったんだからせめて礼ぐらい言ったらどうなんだよ！」

夏代「（苦笑して）始まったわね、この喧嘩」

透「いつものことなんですか？」

秋彦「この従姉弟同士の喧嘩は、須堀家の恒例イベントみたいなものなんだよ」

冬美「懲りないのよね」

元氣「（玲奈の後ろ姿に向かって）お前のほうがバカじゃねえか、このバーカ！」

膨れっ面の元氣。

タイトル

『デカゾク〜我ら捜査一家〜』

20 ファミレス

元氣、玲奈、優子が、ドリンクバーのジュースを飲みながら話している。

優子「今日は災難だったね」

玲奈「本当、人質にはされるし、（元氣を睨んで）こいつに水は掛けられるし」

元氣「まだ言ってるのかよ。玲奈、お前須堀家の家訓その三を忘れたのか？」

優子「何、須堀家の家訓って？」

元気「警察官の家系である須堀家には、代々
伝わる三つの家訓っていうのがあるんだよ」

21 イメージ映像

和室に座る元気の前に三つの巻物が置
いてある——元気、一つ目の巻物を広
げて、

元気「須堀家家訓その一 家族の絆を深める
ためならば、お互いのために如何様な手段
も厭わず」

二つ目の巻物を広げて、

元気「須堀家家訓その二 世のため人のため
ならば、倫理観を持って如何様な手段も厭
わず」

三つ目の巻物を広げて、

元気「須堀家家訓その三 罪人確保のためな
らば、法律に触れない限り如何様な手段も
厭わず」

22 ファミレス

優子「そんなのあるんだ……」

元氣「俺は家訓の通りの行動をしたんだよ。」

文句言われるのは違うと思うけどな」

玲奈「……そりゃ、助けてくれたことは感謝してるよ」

元氣「ホントか？　ありがとうって言われた
覚えないんだけど。むしろ言われたのは、

『バカ』って言葉だったけど」

玲奈「（投げやりに）助けてくれてありがとうと
う」

元氣「いえいえ、どういたしまして」

優子「賑やかだね、さすがは従兄妹だわ」

元氣「賑やかなのは、俺たちだけじゃないん
だよ。如何せん、俺たち須掘家は警察官の
家系だからね」

優子「え、みんな？」

元氣「うん」

23 道

白バイを運転している冬美。

元気の声「俺の母親である須堀冬美は、中央署交通課勤務。普段は白バイをかつ飛ばしてる。須堀四兄弟の末っ子」

24 中央署・生活安全課

相談者の話を聞いている康孝。

元気の声「父親の須堀康孝は、中央署生活安全課勤務。最近は、署に相談に来る人の話を聞く窓口業務が多いみたい。あ、ちなみに婿養子」

25 殺人事件現場となった空き地

夏代がやってきて、現場搜索をする。

玲奈の声「私の母親の須堀夏代は、中央署刑事課の班長。殺人事件に出向くことが多い。ザ仕事人間ってタイプなの。須堀四兄弟の二番目」

26 カジノ会場

違法カジノをしているところへ勢いよ

く乗り込む秋彦。

玲奈の声「さっきの怖い顔した刑事が、私の叔父さんの須堀秋彦。中央署組織対策課勤務で、あの通りいかついから、暴力団とか薬物とか違法カジノとかを普段は担当してる。須堀四兄弟の三番目」

27 中央署・鑑識課

パソコンで仕事をしている佐和。

玲奈の声「その秋彦叔父さんの奥さんが、中央署鑑識課勤務の須堀佐和。鑑識一筋で、パソコンとかITにも詳しいの」

28 道

違反切符を発行しているあかね。

元気の声「俺たちの従姉の須堀あかね。中央署地域課勤務で、駐車違反の車を取り締まったりしてる」

29 県警本部・本部長室

書類に判子を打っている虹子。

元気の声「そのあかねちゃんのお母さんが、
県警本部長の須堀虹子。その名の通り、県
警のトップの超エリート」

30 ファミレス

優子「凄ッ。県警本部長が伯母さんにあたる
わけだ」

元気「そういうこと」

優子「あれ？ でも、四兄弟の一番上は？」

元気「一番上は春雄伯父さんって言って、虹
子伯母さんの旦那さんになるんだけど、十
二年前に、ある事件に巻き込まれて亡くな
ったの」

優子「そうだったんだ……」

元気「あ、もう一人忘れてた」

玲奈「誰？」

元気「お前、自分の父親カウントしないと」
玲奈「あ、そっか。母さんと離婚しちゃった
けど、私の父さんは、今中央署の総務課に

勤務してるの。総務課だから現場には行かないんだけどね」

元氣「伯父さんには、最近会ってるの？」

玲奈「全然」

元氣「そっか」

玲奈「あの二人が、より戻すこともなさそうだしね」

元氣「やっぱりないかあ」

と、ノートに須堀家の家系図を書くと、

元氣「（優子に）はい、こうして家系図にする
と分かりやすいでしょ」

優子「うん、ありがとう。これは見やすい」

無然とした顔の玲奈。

31 須堀家・全景（夜）

都心から一時間ほどの郊外にある洋風建築の一軒家。

32 同・リビング

冬美が夕飯の支度をしている——玄関

のドアの開閉音が聞こえ、康孝が帰宅する。

康孝「ただいま」

冬美「お帰りなさい」

康孝「今日大変だったな。ニュースにはつきり映ってたぞ」

冬美「やっぱり見てた？」

康孝「うちの生活安全課なんて、その話題で持ち切りだったんだよ。しかも、元気が一役買ったらしいじゃないか」

冬美「そうなの」

と、元気が階段を下りてくる。

元気「父さんお帰り」

康孝「ただいま。お手柄だったな」

元気「何が？」

冬美「ニュースで見たんだって」

元気「見てたのかあ」

康孝「大したもんだ。二階から水掛けるなんて」

元気「『罪人確保のためならば、法律に触れ

ない限り如何様な手段も厭わず』っていう家訓を守っただけ。父さんも母さんも、どうせ同じようなことしてたんじゃないの？」

康孝「確かに父さんも犯人捕まえるためだったら、手段は選ばないだろうな」

冬美「別にあの家訓を否定するわけじゃないけど、お父さんは手段を選ばなかったがために、県警本部のエリートから左遷されて中央署の生活安全課に来たんだから」

康孝「おい、その話は」

元氣「別に良いじゃん。県警本部だろうが中央署だろうが、悪いことをした人を捕まえることに変わりはないだろ」

冬美「元氣……」

元氣「県警本部のエリートがそんなに偉いのか？　どんなにすごい犯人捕まえても、地域や自分の身の回りの人たちを助けられないんじゃないか？　それはエリートじゃないと思うけど」

康孝「お前もすっかり、一人前のことを言う

ようになつたな」

冬美「さすが、私たちの子どもだ」

笑い合う一同。

33 中央署・全景（夜）

34 同・鑑識課

パソコンと書類を見ながら、鑑定をしている佐和——ドアが開き、秋彦が入ってくる。

秋彦「佐和。お前、まだ仕事してたのか」

佐和「この鑑定が終わったら帰ろうと思ってたの。そっちだって、こんな時間まで仕事？」

秋彦「始末書だよ、始末書」

佐和「今度は何やらかしたの？」

秋彦「今度ってどういう意味だよ」

佐和「だって、秋彦いつも始末書ばかり書いてるじゃない。取り調べ中に被疑者を殴って気絶させたとか、ガサ入れの時に暴力

団幹部と取っ組み合いの喧嘩したとか……」

秋彦「もうそれ以上言わなくて良い！」

佐和「それで、今回は何の始末書だったの？」

秋彦「今日の事件だよ」

佐和「ああ。元気君と玲奈ちゃんの学校に、

手配中の犯人が立てこもったってやつ？」

秋彦「ああ」

佐和「ちようど冬美さんも、その場にいたら

しいじゃない」

秋彦「そうなんだよ」

佐和「けど、犯人ちゃんと捕まえたのに、ど

うして始末書なんか？」

秋彦「平日の真昼間の高校を騒がせちゃった
からなあ」

佐和「そりゃ追ってた犯人がそのまま高校に
立てこもっちゃったら、何の責任もないと
は言えないか。しかも、姪っ子が人質にな
っちゃったわけだし」

秋彦「まあな。あれ、今日俺が飯当番だつ
け？」

佐和「そうよ」

秋彦「何作ろうかな。チャーハンで良いか？」

佐和「一昨日作ったばかりでしょ」

秋彦「じゃあピラフ」

佐和「大して変わらないじゃない」

秋彦「始末書で頭使っちゃったんだよ。もう

エネルギーもありません」

佐和「分かった。じゃあ、ピラフで良いわよ。

もう少しで終わるから、ちよっと待ってて」

秋彦「はいはい」

35 マンション・全景（夜）

36 同・須堀家・リビング

夏代がソファーに座って、腕を組んだ

まま難しい顔で考え事をしている――

風呂上りの玲奈が入ってくる。

玲奈「母さん？」

夏代「ん？」

玲奈「どうしたの？ そんな難しい顔して」

夏代「ちよつと、今担当してる事件のこと考
えてたの」

玲奈「家にいるときぐらい、仕事のこと忘れ
たら？」

夏代「……」

玲奈「父さん、そういうところが嫌いになっ
たんじゃないのかな」

夏代「……」

玲奈「そりゃ、普段警察官として働いてる母
さんの姿はかつこ良いと思う。仕事が大事
だっていう母さんの気持ちは分かる。でも、
家でもそんな姿見せてほしくない」

夏代「玲奈……」

玲奈「じゃあ、私寝るから。おやすみ（と出
ていく）」

夏代「おやすみ……」

ふと難しい顔になる夏代——と、携帯
電話が鳴る。画面を見て、慌てて電話
に出る。

夏代「お疲れ様です、県警本部長」

37 警察官舎・須堀家・リビング

虹子が携帯電話で話している。

虹子「やめてよ、勤務時間外なんだから県警
本部長って言うの」

夏代の声「すいません、お義姉^{ねえ}さん。つい癖
で」

虹子「良いのよ。それより、どうだった？

玲奈ちゃん、大丈夫だった？」

夏代の声「ええ。怪我がなくて安心しました。

すいません、報告忘れてました」

虹子「無事なら何よりよ。電話したのはね、
全然別件なんだけど、来月うちの人の十三
回忌法要をやるうと思って。みんなそれぞ
れに事件が発生したら出勤しなきゃいけな
い身だっというのは分かってるんだけど、
まあ節目だし、こういう時じゃないとみん
なにも会えないと思ってね」

38 同・須堀家・リビング

夏代「そうですね。秋彦と冬美には、私から
伝えときます。はい、じゃあおやすみなさ
い。（と電話を切って）もう十三回忌か：
…」

39 河川敷（回想）

T「12 年前」

大雨が降っている――ブルーシートで
周囲が囲まれている中、虹子、夏代、
秋彦、冬美が駆けつける。

遺体に布が被せられている――虹子が
めくると、夫・春雄^{はるお}（享年40）の遺
体と直面する。

夏代「兄さん……」

秋彦「兄貴……」

冬美「春雄兄さん……」

虹子「あなた……」

一同、絶句の表情である。

40 警察官舎・須堀家・リビング

仏壇にご飯をお供えする虹子――春雄
の遺影を見つめている。

と、玄関のドアの開く音が聞こえ、あ
かねが帰宅する。

あかね「ただいま」

虹子「お帰り。ずいぶん遅かったのね」

あかね「ちよつと合コンに誘われて」

虹子「合コン！？」

あかね「大丈夫、ロクな男いなかったから」

虹子「変な男と関わっちゃダメよ。あかねだ

って、仮にも地域課の刑事なんだから」

あかね「分かってるわよ」

虹子「さつき、夏代さんに連絡した。お父さ
んの法事の件で」

あかね「班長に？」

虹子「だから、勤務時間外に親族を役職で呼
ぶのやめなさいよ。さつきだって、夏代さ
んに連絡したら、『県警本部長』って言わ
れちゃったんだから」

あかね「しょうがないでしょ。私たち須堀家

みんな警察官なんでもん」

虹子「まあ、それもそうだけどさ」

あかね「法事やるってことは、みんな集まるの？」

虹子「夏代さんが、秋彦さんと冬美さんには連絡してくれるみたいよ。事件が発生しなければね」

苦笑している虹子。

41 寺・全景（一ヶ月後）

42 同・本堂

元氣、康孝、冬美、秋彦、佐和、虹子、あかね、夏代、玲奈、夏代の元夫・

浜川健作はまかわけんさく（48）が顔を揃えている――

――住職が御経を唱え、一同手を合わせて拜んでいる。

夏代、隣に座っている健作を見て、険しい顔をしている。

虹子がトイレから出てくる——夏代が待っている。

夏代「（不機嫌な顔で）お義姉さん」

虹子「何？」

夏代「お義姉さんでしょ、あの男に声かけたの」

虹子「健作さんは、うちの人が可愛がってた部下だし、一応家族だと思って」

夏代「私はあの男とはとっくの前に離婚して、赤の他人なんですよ。だから今日だって、あえて声かけなかったのに」

虹子「そんなに嫌いなの、健作さんのこと」

夏代「嫌いだから離婚したんです。正直、今も職場が同じだけで吐き気するんですから」

虹子「健作さんは総務課で、一緒に捜査会議で顔合わせるわけじゃないんだから」

夏代「けどね……」

と、秋彦と冬美がやってくる。

秋彦「何してるんだよ、みんな待ってるぞ」

冬美「どうしたの、そんな不機嫌な顔して」

虹子「健作さんが来てるのが気に入らない
みたいで」

秋彦「今日ぐらい許してやれよ。玲奈は、こ
ういう時じゃないと父親に会えないんだか
ら」

冬美「そうよ。いくら健作さんが嫌いだから
って、そんなに目くじら立てなくても……」

夏代「何よ、みんなして……」

と、ブツブツ文句を言いながら戻って
いく。

44 同・本堂

談笑している元気、康孝、佐和、あか
ね、玲奈、健作——そこへ襖が開き、

虹子、夏代、秋彦、冬美が戻ってくる。

虹子「皆さん、本日は亡き夫・春雄の十三回
忌法要にお集まりいただき、ありがとうご
ざいます。早いものであの事件から九十二
年。未だ犯人も捕まっておらず、私たち家

族が大黒柱を失った今もなお、犯人は何食わぬ顔で生きているということを考えると許せない気持ちでいっぱいです。実は最近になって、夫を殺害した犯人は内部の人間だという情報を耳にしました」

一同騒然となる。

秋彦「本当なんですか？」

虹子「ええ。もちろん、まだ噂だし、誰が犯人なのかという根拠もない。けど、これももし圧力による隠蔽だとしたら、未だに犯人が見つからないのも当然だっていう気がするの」

元氣「圧力っていうのは、簡単につぶすことはできないんですか？」

虹子「そうね……裏で口裏を合わせたり、根回しをしたり、どんなに頑張っても却って不利になってしまうことも、正直組織ではあることよ」

元氣「案外汚いんですね、警察組織って」

玲奈「警察官の力で、白いものが黒になるこ

とが当たり前にあるってことか」

夏代「当然、そんなことはあつてはならないことよ」

秋彦「俺だって、薬物中毒で捕まえた犯人が大物政治家の息子だっていう理由で、上からの圧力で釈放したこともある。けど、そんなこと本来なら許されないことなんだ」

虹子「そう。でもそれができてしまうのが、警察の権力や圧力なの。でも私は、そんなことで泣き寝入りする被害者を見たくない。私やあかねは、それで十二年辛い思いをしってきた」

あかね「……」

虹子「だからね、私、ちよつと思いついたの。警察が捕まえない極悪人がいたら、私たちが捕まえようかと思つて」

佐和「え？ 私たちつて言うのは……」

虹子「つまり、表向きの警察官ではなくて、私たち須堀家の人々が警察組織という枠から外れて自由な捜査をするシステムを作る

うかと思つて」

あかね「母さん、何言ってるの？」

虹子「だって悔しいじゃない。目の前に犯人がいるのに、権力や圧力によって捕まえられないなんて。それじゃあ警察組織の名が
廢るでしょ」

元氣「けど、そんなことできるんですか？」

虹子「元氣君、玲奈ちゃん。現行犯逮捕って一般の人でもできるって知ってる？」

元氣「ええ。聞いたことはあります」

玲奈「まさか、私たちも犯人捕まえるんですか？」

虹子「そういうこと。実はね、もうこんなのも作っちゃったのよ」

と、レインボーカラーの手錠を鞆から取り出し、一同に見せる。

元氣「何作ってるんですか……」

虹子「どう？ 良いでしょ」

元氣「名前が虹子だからって、何も手錠までレインボーカラーにすることないでしょ」

健作「あの、本部長。お言葉を返すようですけど、私人が他人に手錠をかけることは違法なんじゃありませんか？」

夏代「他人が口出しするんじゃないわよ。法事は終わったんだから、とつとと帰りなさいよ」

健作「俺は本部長からお声がけいただいたて来たんだよ」

玲奈「ちよつと、こんな時に夫婦喧嘩なんかしないでよ」

健作「じゃあお前は、この案に賛成なのか」

夏代「当たり前じゃない」

健作「はあ？」

夏代「私だって、権力や圧力のために事件を闇に葬り去ることなんてできない。このシステムなら、どんな犯人でも捕まえられるのよ。力入るじゃない」

秋彦「俺も乗った！　どんな犯人でも、罪を犯した者に変わりはないからな。権力なんかに負けてたまるかよ。そんなものに隠れ

て好き放題やってる奴なんかぶっ飛ばしてやるよ」

冬美「そうね。私も、お義姉さんの話に賛同します」

あかね「皆さん、何もうちの母さんに無理に合わせることなんてないですよ」

玲奈「でも、権力に動じない人たちが犯人捕まえるのって、何だかカッコいいじゃない」

元氣「確かに、警察組織に縛られずに自由に犯人を逮捕できるシステムは良いかもしれない」

佐和「私も、鑑識の観点から協力させていただきます！」

虹子「みんな、ありがとう。これで須堀捜査一家の誕生ね！ あ、ちなみに捜査一家の『か』は、『家』っていう字だからね」

元氣「虹子伯母さんのアイデアとセンスには脱帽ですわ」

と、夏代の携帯電話が鳴る。

夏代「はい、もしもし。え、廃倉庫でホーム

レスの遺体発見？ 分かったわ、佐和さんと一緒にすぐ臨場するわ。(と佐和に)行くわよ」

佐和「はいッ」

夏代「(一同に)じゃあ、私たちはこれで」

と、夏代と佐和、荷物をもって飛び出していく。

と、秋彦の携帯電話が鳴る。

秋彦「もしもし、俺だ。そうか、奴がとうとうしつぽを巻いたか。俺も今から直行する。(と電話を切ると)じゃあ、俺もこれで」

と、飛び出していく——冬美と康孝の

電話が鳴る。

冬美「(電話に)もしもし。え？ はい、分かりました。すぐ向かいます」

康孝「(電話に)え、あのおばあちゃんまた来てるんですか？ はい、すぐに戻ります」

元氣「二人とも、また事件？」

頷く冬美と康孝。

元氣「いってらっしゃいませ」

冬美・康孝「行ってきます」

と、出ていく——見送る元気、あかね、

玲奈、健作、虹子。

玲奈「父さんは、事件とかないの？」

健作「俺は総務課だからな。事件が起きても

現場には行かないんだ」

元気「地域課は平和そうだね」

あかね「そうでもないよ。違反切符切ったら、

見逃してほしいとか、醜い言い訳して何と

か切符切られたくないとかさ」

虹子「これぐらい騒がしいのが、須堀家らし

い気もするけど。ねえ、あなた」

飾られている春雄の遺影を見る虹子。

45 中央署・全景

46 同・生活安全課

康孝がやってくる——と、一人の老

婆・一ノ瀬^{いちのせ}よね（79）が座っている。

康孝「よねさん。今日はどうしたの？」

よね「刑事さん、聞いてくださいよ。お金を取られたんですよ」

康孝「またそんなこと言って。使っちゃったんですよ。この間だって、持ち合わせがないからって、万引きしちゃったでしょ」

よね「本当にお金を取られたんですよ。（と預金通帳を見せて）ほら、今日引き落とされてるんですよ」

康孝、預金通帳を見る——二百万円が引き出されている。

康孝「よねさん。これ、自分で引き出してないの？」

よね「ええ」

康孝「じゃあ、誰が引き出したの？ 誰かに暗証番号とか教えちゃったとか？」

よね「……」

康孝「教えたの？」

よね「そういえば、消費者生活相談センターっていう人から電話がかかってきて、ローンや過払い金の相談に必要な情報だからっ

て教えた」

康孝「……よねさん、それ詐欺だよ。騙され
たんだよ」

よね「え……？　じゃあ、お金は……？」

康孝「取り戻すためには、その相談センター
を名乗った犯人を突き止めないといけない
んだよ」

よね「そんな……」

難しい顔の康孝。

47　テナントビル・全景

48　同・一室

固定電話や携帯電話がいくつも並べら
れている――デスクで札束を数えてい
る水沼龍一みずぬまりゆういち（26）。部下たちがパソ
コンで仕事をしている。

部下A「ボス。あのばあさん、正直に暗証番
号教えてくれましたよ」

龍一「これだからババアは騙しやすいんだよ

な」

と、龍一の電話が鳴る。

龍一「もしもし、なんだよ親父。あ？別に俺が何やろうと勝手だろうよ。俺にもしものことがあったら、親父の力で何とかしてくれよ。じゃ、俺忙しいから」

と、電話を切ると、再び札束を数え始める。

部下B「親父さんですか？」

龍一「ああ」

部下B「大丈夫ですか？」

龍一「心配するな。親父の力があれば、俺は捕まらないんだよ（と笑い出す）」

49 県警本部・全景（数日後）

50 同・本部長室

虹子が仕事をしている——ノック音がして、元気が入ってくる。

元気「失礼します」

虹子「いらつしやい、元気君」

元気「すげえ、ここが本部長室ですか」

虹子「そうよ」

元気「ここに来るまで、すれ違う刑事さんに
変な目で見られましたよ。何で高校生がこ
んなところいるんだみたいな顔で」

虹子「まあ確かに、高校生が本部長室に来る
ことなんてないか」

元気「それよりも、見せたいものって？」

虹子「ちよつとついてきて」

51 須堀捜査一家本部・事務所

県警本部隣接のプレハブ事務所の地下
に造られた会議室。

元気と虹子が入ってくる。

虹子「どう？ ここ」

元気「随分本格的に作ったんですね」

虹子「そりゃ、須堀捜査一家を造った以上は、
ちゃんとした環境も作らなきゃと思って」

元気「ここでなら、捜査会議もちゃんとでき

るってことですね」

虹子「そういうこと」

元氣「虹子伯母さんが、この捜査一家を造りたい気持ちは、この間の法事の時に分かりましたけど、権力や圧力で揉み消される事件って、そんなにあるんですか？」

虹子「無いと言ったら、嘘になるわね」

元氣「春雄伯父さんのことも、この間の法事で言っていましたけど……」

虹子「そうよ。警察内部に犯人はいる。でも、何かの圧力で揉み消されることは確かなの。

草葉の陰から泣いてるわよ、うちの人も」

元氣「……」

虹子「警察官が殺害されたのに、未だ犯人は捕まってる。殺人罪の時効が廃止になったとはいえ、うちの人を殺害した犯人は、まだ平然と生活してる。それだけでも許せないのに、その犯人が警察内部にいるかもしれないのよ。事件当時、県警本部だって絶対に何かを掴んでたはず。でも、そこ

から事件に関する証拠は何一つ出てこなかった。あの人の無念を晴らすためにも、私は真相を知りたいと思ったの」

元氣「伯母さん……」

虹子「ここまで来るのに、長い道のりだったわよ」

元氣「そりゃ、県警本部長なんて誰でもなれるわけじゃないですもんね」

虹子「ここまで来たら、絶対何か見えてくる。

私はそう信じてる。だからこそ、この須堀捜査一家を造ったのよ」

元氣「……」

虹子「元氣君。力を貸して」

元氣「はいッ……！」

52 中央署・生活安全課

康孝が、険しい顔をして防犯カメラの映像を見ている——同僚刑事がやってくると、

同僚A「（防犯カメラの映像を見て）あれ、

この男、どっかで見たことがあるような」

康孝「え？」

同僚A「あ、思い出した。こいつ、詐欺の常習犯です」

康孝「何ッ……？」

と、別の防犯カメラの映像を見ると、

康孝「このビルに入っていくな」

同僚A「やっぱり、変わってないんだな」

康孝「どういうことだ？」

同僚A「このテナントビルの五階が、こいつらのアジトなんですよ」

康孝「だったらすぐ逮捕できるだろ」

同僚A「それが、いつも逮捕できないんです」

康孝「何でだよ」

同僚A「どうも、圧力がかかってるみたいで」

康孝「この詐欺グループ、ただの半グレとかじゃなさそうだな。ちょっと出てくる」

同僚A「あ、須堀さん……」

康孝、颯爽と出ていく。

53 テナントビル・一室

札束を数えている龍一——帽子を深く被った父・一郎いちろう（63）が来ており、話している。

一郎「いつまでこんなこと続けるつもりだ」

龍一「さあな」

一郎「もうこれ以上は底いきれんぞ」

龍一「親父の力があれば、何とでもなるだろ」

一郎「……」

龍一「まだまだ、親父の力を使って、稼がせてもらうぞ（と百万円の束を一郎に渡す）」

一郎「こんなものいらんッ」

と、札束を投げ捨てると、憤然と去っていく。

54 同・表

康孝が張り込んでいる——と、一郎が周囲を気にしながら、コソコソと去っていく。

康孝「あれが、黒幕か？」

と、一台の黒いセダンがやってくる――
――一郎、帽子を取り、後部座席に乗り
込む。

康孝「あの男……まさか……」

55 同・本部長室

虹子が仕事をしている――ノック音が
する。

虹子「はい」

と、ドアが開き、康孝が入ってくる。

康孝「失礼します」

虹子「あら、どうしたの？」

康孝「例の捜査一家としてご相談したい案件
があります」

虹子「詳しく聞きましょう」

× × ×

ソファ―に座って話している虹子と康
孝――書類を虹子に渡す康孝。

虹子「水沼って、前法務大臣の？」

康孝「ええ。うちの生活安全課に相談しに来

たお年寄りが、この水沼の息子が仕切っている詐欺グループに二百万騙されたそんなんです」

虹子「二百万……」

康孝「詐欺グループにしては、すぐに身元がバレるような感じだったので調べてみたら、このグループのボスが水沼の息子だということが分かったんです。それに、水沼の部下たちは詐欺で何度も逮捕されていますが、すぐ釈放されてるんです」

虹子「首謀者が息子となれば、間違いなく水沼によって、中央署に圧力がかかってるわね」

康孝「その可能性は間違いないでしょう。だからこそ、この事件、何とか解決したくて」
虹子「そうね……よし、早速みんなを集めましょう」

56 須堀捜査一家本部・事務所

元氣、康孝、冬美、虹子、あかね、夏

代、玲奈、秋彦、佐和が集まっている。
ホワイトボードに関係者の写真や情報
が記されている。

虹子「今回の被害者は、生活安全課の康孝さ
んの元を訪れたお年寄り、一ノ瀬よねさん」
康孝「消費者生活相談センターを名乗る職員
に、銀行口座の暗証番号を伝えてしまい、
二百万を騙し取られました」

玲奈「お年寄りからお金騙すなんて許せない」
虹子「この詐欺グループの元締めは、水沼龍
一。前法務大臣だった水沼一郎の息子」
秋彦「(写真を見て)悪そうな顔してるな」
元氣「秋彦伯父さんも、言うて悪い顔してま
すよ」

秋彦「そうか？」
元氣「前科四犯みたいな顔してます」
秋彦「どんな顔だよ」

康孝「息子の龍一は、詐欺の常習犯ですが、
全部父親の圧力によって、事情聴取は受け
てますが、その日のうちの釈放されています」

冬美「典型的な、どうしようもないバカ息子
ってわけだ」

虹子「部下たちも、逮捕はされてるものの、
すぐに釈放されてます。おそらくここにも、
水沼の圧力がかかっているかと」

康孝「それに、同じような手口で、金をだま
し取られたという相談案件がいくつも来て
います」

あかね「消費者生活相談センターを名乗る職
員ってやつですか？」

康孝「調書を調べたら、相談者は皆『消費者
生活相談センターの職員に暗証番号を教え
た』とのこと。それに、ターゲットは
みんな七十歳以上のお年寄りで、大半は一
人暮らしです」

佐和「被害者層も狙った、計画的な犯行って
ことは間違いないですね」

夏代「逮捕の後にすぐ釈放されたって言った
けど、一回じゃないでしょ。このグループ
は、何回も同じ犯行を繰り返してるわね」

康孝「まさにその通りです。過去の資料を見
たのですが、やはり同じ手口の犯行を何回
もやってみました」

あかね「懲りないんだね。一回警察の厄介に
なつて、それでもまだ同じような罪を犯す
なんて」

玲奈「結局、父親が全部揉み消してくれてる
から、ある意味では無敵状態なんでしょ」

虹子「そういう犯罪だからこそ、私たち須堀
捜査一家の出番というわけ」

夏代「それで、どういう風にグループ一味を
捕まえるの？ 普通に捕まえたって、結局
はいつも通り揉み消されるのがオチでしょ」

冬美「そうよね」

虹子「せっかく集まったこの顔ぶれよ。ここ
は、須堀家一同の連携プレイで行きましよ
う」

57 テナントビル・表

杖をついて白髭をつけて老父の役をし

ている元気——制服姿で付き添っている玲奈。

元気「何で俺がこんな役を」

玲奈「しよすがないでしょ、あんた演劇部なんだから」

と、龍一の部下Aが待っている。

元気「（おじいさん声で）あの、すみません。

電話した山田ですが」

部下A「山田さん。お待ちしました」

元気、鞆から封筒を出して、部下Aに渡す。

元気「（おじいさん声で）これを払えば、過

払い金が戻ってくるんですよ」

部下A「はい、もちろんです」

と、物陰から様子を見張っている康孝と秋彦——近くの駐車場に止まっている車の中から様子を見ている夏代、佐和、虹子。

佐和「大丈夫かしら」

夏代「あの二人なら、ちゃんと良いスタート

を切ってくれるわよ」

虹子「そうね」

と、部下Aが戻ろうとすると、腕をつかむ元気。

元気「（おじいさん声で）あの、やっぱりそのお金返してくれんかのう」

部下A「こちらをいただかないと、過払い金は戻ってきませんけど」

玲奈「おじいちゃん、これ詐欺かもしれないよ？」

部下A「そんなわけないだろッ」

と、康孝と秋彦が通りかかる。

康孝「どうしました？」

部下A「いや、別に」

元気、部下Aの腕をしっかりとつかんでいる。

元気「（おじいさん声で）ごじょうだから、返してくれ」

康孝「何ですか、その封筒は」

部下A「いや、これは……」

と、元気を投げ飛ばすと、走ってその場を去っていく。

元氣「いて！」

康孝「こら待て！（と走って追いかける）」

元氣「馬鹿野郎。年寄りをいたわれ！（と

白髭を取ると）あとは大人たちに任せよう」

玲奈「名演技だったわよ」

元氣「サンキュー！」

秋彦「よし、じゃあここの後始末は俺だな」

元氣「お願いしますッ！」

58 同・一室

秋彦が乗り込んでくる。

秋彦「おい！ 警察だ。おとなしくした方が身のためだぞ」

と、驚く龍一と部下たち。

龍一「おい、お前ら逃げるぞ」

と、秋彦に反抗しながら出ていく。

秋彦「おいおい、そう慌てるなって」

と、呑気に後を追いかける。

59 同・表

龍一と部下たちが出てくると、止めてある車に乗り込み、急発車する。その近くに止めてある車の中に乗っている虹子、夏代、佐和——虹子、電話をかける。

虹子「あかね。今、そっちの方向に向かったわ。車のナンバーは前に伝えた通りよ」

60 表通りの道

路肩に止めているパトカーに乗っているあかね。

あかね「（電話に向かって）分かった母さん。後は任せて」

と、狭い道路から龍一の乗った車が横切っていく——あかね、それを確認するとパトライトをつけてパトカーを発信させる。

あかね「前のワンボックス、止まりなさい」

61 龍一の車の中

龍一「何でこんなにも警察が近くにいるんだよ」

部下B「ボス、どうします？」

龍一「逃げるしかないだろ」

62 表通りの道

龍一の乗った車が追い越し車線を使いながら猛スピードで走っていく――その後を追いかけるあかねの運転するパトカー。

63 狭い道

部下Aが走って逃げしており、後を追いかける康孝――と、乗用車が前に通りかかる。夏代が運転し、助手席に虹子、後部座席に佐和。

夏代「乗って！ 追われてるんでしょ？」

部下A「誰か分からねえけど、助かる！」

と、車の後部座席に乗り込む。

康孝「後は頼みます」

と、敬礼をして見送る。

64 夏代が運転する乗用車の中

部下A「いや、助かった……。警察に追われ
てたんだよ」

虹子「ねえ君。小さい頃、習わなかった？

知らない人の車に乗っちゃいけないって」

部下A「え……。？」

と、夏代がブレーキをかける——夏代、

虹子、佐和、一斉に警察手帳を見せる。

部下A「嘘だろ……。？」

佐和「はい、指紋取りますよ——（と部下Aの
手をつかむ）」

今にも泣きそうな部下A。

65 道

龍一の乗る車が、猛スピードで通過す
る。

66 龍一の乗る車の中

部下B 「あのパトカー、もう追ってこなくなりましたね」

龍一 「追いつかれてたまるかよ」

と、サイレンが聞こえる——龍一、バックミラーを見ると、猛スピードで白バイが追いかけてくるのが見える。

龍一 「え、白バイ？」

67 道

白バイを運転している冬美。

冬美 「はい、前のワンボックス止まりなさい」

68 龍一の乗る車

部下B 「どうするんです？」

龍一 「とにかく逃げるしかないだろ」

69 道

龍一の乗る車がスピードを上げて走っ

ていく——その後を追う冬美の運転する白バイ。

70
ふ頭

乗用車が止まっている——その中に乗っている夏代、虹子、佐和、部下A。パトカーが止まっている——その中に乗っている元気、玲奈、康孝、あかね、秋彦。

元気「本当に、ここに来るのかな？」

秋彦「冬美の追跡は、ちゃんと計画的になってるんだ。上手いこと誘導して、ここまで来させるようになってるんだ」

元気「母さん、そんな技術あったんだ」

玲奈「来た！」

元気「え？」

と、龍一の乗る車と冬美の運転する白バイがやってくる。

康孝「さすがは冬美」

元気「母さん、すげえな」

あかね「元気、そろそろ構えた方が良いんじ

やない？」

元気「うん、そうする」

元気、パトカーから降りると、カラーボールとテニスボールランチャーを持っている。

元気、龍一の乗る車の前に現れると、テニスボールランチャーにカラーボールを詰める。

元気「権力が何だ。圧力が何だ。どんな犯罪だって、俺たち家族が許しません！」

テニスボールランチャーを龍一の車に向けてる。

元気「発射！（とボールを打つ）」

カラーボールが、龍一の車のフロントガラスに付着する。視界を見失い急停車する龍一の車——康孝がやってくる、運転席を開け、龍一を車から降ろし、虹色の手錠をかける。

康孝「水沼龍一、詐欺の罪で逮捕する」

龍一「俺は捕まらないんだよ。親父の力を借りれるからな」

と、玲奈がやってくると、

玲奈「それは無理よ。あんたとお父さんの情報
報はSNSとマスコミを使って、私が情報を流したから（とスマホを見せる）」

龍一「そんな……」

秋彦がやってくると、運転席から部下
Aを無理やり引きずり下ろし、

秋彦「下りろ、ゴラァ！（と虹色の手錠を
かけて）てめえのことも、たっぷり取り調
べてやるから覚悟しとけよ」

部下A「（怯えて）あ……はい……」

秋彦「馬鹿野郎ッ（と部下Aの頭を叩く）」
康孝「俺たちは、権力や圧力なんて怖くない
んだ。組織で動いてるんじゃない、家族で
動いてるんだからな」

龍一「家族……？」

元気「俺たち、みんな親戚なんだよ。家族が
揃えば、どんな事件が来たって怖くないん

だよ」

虹子、夏代、佐和、冬美、あかねもや
つてきて、一同で龍一を取り囲む。

虹子「私たちは、あんたみたいに権力に頼つ
て犯罪を甘く見てるような奴らをちゃんと
捕まえるの」

あかね「家族の力、甘く見るんじゃないよ」
冬美「スピード違反と信号無視も、余罪に入
れるわね」

佐和「さつき採取した指紋、しっかり鑑定さ
せてもらうから」

夏代「さ、じっくりと話聞かせてもらおうか」
龍一「……降参です（とその場にしゃがみ込
む）」

71 中央署・全景（数日後）

72 同・生活安全課

新聞を見ている康孝——『水沼前法務
大臣 議員辞任！』の記事を読んでい

る。

73 道

違反切符を発行しているあかね——街頭テレビに、『水沼前法務大臣 議員辞任』のニュースが映っている。

あかね「（呟いて）自業自得だね」

74 県警本部・本部長室

虹子が、窓からの景色を眺めている——席に着座すると、机の上に飾られている春雄の写真を見つめる。

虹子「あなた、待っててね。真相は、必ず私たち家族で暴くから……」

75 中央高校・廊下

元気と玲奈が歩いている。

元気「お前のSNSでの影響力って、すごいなんだな」

玲奈「どう？ 少しは私のこと見直した？」

元氣「元々お前のことは評価してたよ」

玲奈「へえ、そんな記憶ないんだけど」

元氣「まあ、何はともあれだよ。これで、一つの事件が解決できたんだから」

玲奈「それもそうだね。でもさ、詐欺でだまし取ったお金って、あいつらが使っちゃったんじゃないの？」

元氣「それがね、返金する中で足りなかった分は、父親が立て替えるんだって。金持ってる人はそういう対処もすぐにできて羨ましいよ」

玲奈「結局、最後まで父親の力を借りたってわけだ」

元氣「どうしようもない息子でも、やっぱり家族だから、父親として見捨てられなかったんじゃないのかな」

玲奈「家族の縁ってさ、よっぽどのがない限り、切れないよね」

元氣「絶縁状態な家族とか、籍を抜く親子もいるからね」

玲奈「父さんと母さん、もう一回結婚してくれないかな」

元氣「やっぱり、健作伯父さんが家にいないと寂しい？」

玲奈「まあね。母さん、家にいてもさ、いつも事件のことばかり考えてるから。結局それが離婚の原因にもなったわけだし」

元氣「夏代伯母さんは仕事人間だからね。この間の春雄伯父さんの法事の時だって、殺伐としたオーラ出してたからね」

玲奈「私の願望なの。二人がより戻してくれることが。半分以上は諦めてるけどさ、そういう気持ちでないと、何だか父さんが不憫というか……」

元氣「離婚した当人同士は良いかもしれなくて、子どもが被害者になってるってことを、夏代伯母さんに分かってもらわないとね」

玲奈「そんなこと分かるような人じゃないけどね、うちの母さんは」

元気「……」

76 中央署・廊下

夏代が歩いている——反対側から健作がやってくる。が、目も合わせずすれ違っていく二人。

健作「あのさ……」

夏代「（立ち止まって）……」

健作「養育費の件、あと二年で良いのか？」

夏代「あの子が大学に行きたいって言ったら、

また相談するわ」

健作「そっか。あとさ……」

と、そそくさと去っていく夏代——
然と見送る健作。

77 須堀家・全景（夜）

78 同・リビング

テーブルの上に玉ねぎの束が転がっている。

冬美「何これ？」

康孝「よねさんが、今日持ってきてくれたんだ。お金が戻ってきたお礼だって」

元氣「こんなにどうしたの？」

康孝「自分ちの畑で作ったやつだって」

元氣「へえ」

康孝「けどさ、ちゃんと蓄えもあって、畑で野菜作りもしてるような人がさ、どうして万引きなんてしてたんだろ」

元氣「多分、寂しいんじゃないかな」

康孝「え？」

元氣「誰かに構ってもらいたかったんだよ。お金があっても寂しいものは寂しいんだよ。それに今回みたいにさ、お金があったから騙されるようなことだってあるんだし。お金って面倒くさいね」

冬美「そういう困っている地域の人たちを助けるのも、捜査一家の役割にしたいわね」

元氣「母さんも随分乗り気じゃん」

冬美「結構ハマリそう。この活動」

康孝「仕事もちやんとしろよ」

冬美「分かっているわよ。でもこういう活動を
していくうちに、春雄兄さんの事件の真相
も明らかになったら良いなと思って」

康孝「そうだな……」

元氣「俺も、今回みんなと一緒に犯人逮捕で
きて良かった。いつかはみんなで、春雄伯
父さんを殺害した犯人、捕まえたいよね。
誰よりも、一番この手で犯人を捕まえたい
って思ってるのは虹子伯母さんだと思うけ
ど」

康孝「そうだな」

冬美「春雄兄さん、まだ成仏できてないわよ。
犯人がまだ捕まってないんだから」

元氣「本当、一体誰が春雄伯父さんを殺害し
たんだろう。動機も何にも分かってないん
だろ」

冬美「そうなの……。本当、あの事件は謎だ
らけよ……。通り魔とも思えないし、当時
は怨恨の線で調べてたみたいだけど、それ

らしい人は浮かばなかった」

隆文「じゃあ、やっぱり虹子お嬢さんが言っていた、内部の犯行ってことか……」

冬美「だとしても、理由が分からない」

元気「……」

と、元気のスマートフォンが鳴る。

元気「（電話に出て）もしもし、玲奈。今？
家にいるけど。え、今から？ 分かった、
すぐ行くわ」

冬美「玲奈ちゃん、何かあったの？」

元気「分かんない。すぐに来てくれて」

康孝「こんな時間に呼び出すなんて、何かあったのかな？」

冬美「直接だったら、明日学校でも良いのに
ね」

元気「とにかく、行ってくるわ」

冬美「うん、行ってらっしゃい」

元気、出ていく——訝しそうに見送る
康孝と冬美。

元気が走ってやってくる——ベンチに座っている玲奈と優子。

元気「玲奈ッ」

玲奈「ごめん。遅くに呼び出して」

元気「どうしたんだよ、優子も一緒に。話すことがあるんだったら、別に明日学校でも良かったじゃないか」

玲奈「学校じゃ話せないことだし、何より急ぎの用だったから呼び出したんじゃない」

元気「それで、話して何だよ？」

優子「（うつむいて）……」

玲奈「それがさ……（と優子を見る）」

元気「優子……？」

優子「私、人を殺しちゃった……」

元気「（啞然と）え……」

つづく